

家郷の訓

C.K

人の世は、移ろい易く極端から極端に振れ動くのを常としています。

神に逆らい、離れて住むアダム以降の罪人の宿命です。この罪人に父なる神は聖書とキリストの十字架の復活を通して、定められた人々に慈しみを与え、最後の審判の時も、全てにおいて育み導いておられます。箴言、書簡等を通してキリスト者が、キリスト者としての教育の方法と姿勢をどの様に持たねばならないかを示して下さっています。

聖書は、定められた者の罪からの贖いと救いに付き完璧に記されています。教会はキリストの肢体であると言われています。横浜中央教会もイエス様の肢体の一部です。

信仰は、個人と主との間の関係だと言う考えが今は最も重く見られていますが、理性的に判断出来る大人だけで無く、乳飲み子や幼児達も学童も障行者もキリストとの契約の内に入られている者は全て肢体の一部です。

教会は信仰共同体であり、信仰をどの様に伝えて行くかの課題をいつも要求されています。

聖書を見ると次の様に記されています。

主の選ばれる場所にあなたの神、主の御顔を拝するために全イスラエルがあつまるとき、あなたはこの律法を全イスラエルの前で読み聞かせねばならない。民を、男も女も子供も、町のうちに寄留する者も集めなさい。彼らが聞いて学び、あなたたちの神、主を畏れ、この律法の言葉をすべて忠実に守るためであり、これをまだ知らない彼らの子供たちも聞いて学び、あなたたちがヨルダン川を渡り、入って行って得る土地で、彼らも生きている限り、あなたたちの神、主を畏れるようになるためである。申命記31:11~13

これを具体化させる方法として、非キリスト者・民俗学者の現した『家郷カキョウの訓オシエ』（岩波文庫）を参考にするのが良いと思います。

この本の目的は、時代変遷の中で伝承と新しい工夫の両者が生活の中に組み入れられ、家庭・地域・社会（教会）が子供の躰にどの様にかかわっていたかを見る事であり、第二は、家庭や地域（教会）の論理と学校教育の論理との間の相互関係を位置付ける事でありました。と記しています。

時代の変遷の中で、教会での伝承と新しい工夫の両方がキリスト者生活の中でどの様に取り組むと良いかの参考となると思います。硬直したり弛緩した姿勢を正す一つの方法ダと思います。

教会に初めての方がいらっしやると、とても嬉しい気持ちになりますね。と同時に毎回頭をよぎるのは、私が初めて教会の礼拝に出席した時の、戸惑いの数々です。(このことは、以前、礼拝後の昼食時に何人かの方々にお話したことがあります。)

クリスチャンではない両親のもとで育った私は、教会附属の幼稚園でイエス様に出会い、引っ越しにともない小学校時代は教会に行く機会がなく、またまた引っ越した中学時代はクラスメートに誘われて教会学校に行きましたが、初めて礼拝に出席したのは大学一年の時でした。久しぶりに行った教会では、教会学校の中学科の先生だった方が喜んで迎えて下さったのですが、その先生はオルガニストだったので礼拝が始まるとオルガンの方へ行ってしまう、前の方に座ることに抵抗のあった私は一番後ろの列に座りました。だいたいの讃美歌は、ページを開く前に前奏が終わり、歌が始まりました。前奏は曲の最後だけだったので短かったのです。小さい頃からピアノを習っていたので、ページさえ見つかれば音符を読んで途中からでもなんとか歌うことはできましたが、出遅れたと焦ってしまっただけで、意味はちっとも頭に入ってきませんでした。

聖書朗読も、ついていくのが大変でした。私は教会学校の中学科の時に「限定3冊大特価」ということでジャンケンに勝ち、聖書を購入していました。ところが、ほとんど読んだことがなかったので、どこに何の書が書かれているかもわからず、更に新品の辞書のようにページとページがくっついていて、なかなかその日のみ言葉に行き着きませんでした。けれども、司会の方はベテランのクリスチャンですから、聖書箇所を言うとすぐにページを開き、さっさと読み始めてしまいました。司会者は十分に準備されてきたということで素晴らしいのですが、新米には大変でした。(その後何年も経って、別の教会で、司会者がなかなかその日の聖書のページを開けられないことがありました。新米の人のペースに合わせるため、聖書箇所を紐や付箋をあえて付けず、その場で聖書を開くようにしておられるとのこと。その時は不手際を詫言いでいらっしやいましたが、私はその配慮に感動しました。)

受付で渡された週報には不思議な記載がありました。色々な当番の方の名前が載っていましたが、フルネームで書かれたその後には必ず兄弟とか姉妹と書かれていたのです。一人っ子はいないのかしら？我が家は姉弟なんだけど？と思いつつ礼拝の様子を見ていたら、当番として出てくるのは皆1人ずつ。一体どうなっているのかしら？と何とも不思議でした。イエス様の十字架によって罪が赦され救われた私たちは、父なる神さまの子どもとされるから、お互いが兄弟姉妹なのだというのをその時は知りませんでした。横浜中央教会の週報には、フルネームの後に兄とか姉と付いていますが、弟や妹として生まれた方々も安心して教会に来ていただきたいと思います。

礼拝もいよいよ終盤となり、最後の讃美歌を歌う時、またときどきすることがおこりました。膝の上の荷物を椅子に置いて立ち上がり、讃美歌のページを開こうとした時、まわりに讃美歌を開く人を見当たらないのです。えっ、今、司会者が讃美歌△番を歌いますって、言ったわよね!?空耳だったのかしら??皆さんは何を歌うのかしら?…もう一度週報を確認して、やっぱり讃美歌だ!と急いで開きましたが、短い前奏と共に曲はほとんど終わってしまいました。ベテランクリスチャン達は、讃美歌を暗譜で歌えたのですね。

その後の「報告」でも兄弟・姉妹の嵐は続き、病気を「治す」ではなく「癒す」と言うなど、聞き慣れないキリスト教的日本語が飛び交っていました。

スリリングな礼拝体験でしたが、礼拝後に何人もの方々が暖かく声をかけて下さったので、この教会にも私の居場所があると実感することができ、ほぼ毎週通うようになりました。

イエス様が新来会者の方達に用意なさっている居場所が、この教会にちゃんとありますよ、だからこれからも是非続けて来てイエス様に出逢って下さいね、という気持ちを込めて、暖かい挨拶をしたいと思います。新来会者の方が何時いらしてもいいように、祈って心の準備をしようと思います。

最近気づいたことから

T.K

日本で、クリスチャンでない人々もよく知っている讃美歌の一つは讃美歌461番、「主我を愛す」だと思います。この曲は子ども向けの賛美として考えられています。私もそのように考えていました。我が家の子どもたちが小さかった頃、悪夢や雷などで怖がったとき、『主我を愛す』を歌えば怖くないよ、イエス様が一緒にいてくださるからね」とよく言ったものです。私自身も悪夢でうなされたとき夢の中でそのことを思い出して歌ったのを覚えています。後で家族に言わせると、寝ているのに声が聞こえて気持ち悪かったそうです。なんと短絡的だったのでしょうか。

CRCの讃美歌集では、これは「Walk With God」（神と一緒に歩きましょう、信仰生活？）のジャンルに収められていて、特に子ども向けと考えられていたのかどうかはわかりません。ただ歌詞にはよく「子ども」が出てきます。1番の歌詞では「小さい人々」、2番では「彼の小さい子ども」、3番では「彼の膝に抱かれた子どもたち」で、3番までです。このような歌詞から日本語に翻訳し讃美歌を編集するとき、子ども向けの讃美歌と考えたのかもしれませんが。

御存じのように1番の歌詞は以下のとおりです。

「Jesus loves me, this I know, for the Bible tells me so,
Little ones to him belong; they are weak, but he is strong.
“Yes, Jesus loves me! Yes, Jesus loves me!
Yes, Jesus loves me! The Bible tells me so.”」

でも日本語の歌詞では逆に、「小さい人」「子ども」というのは無く、すべて「我」になっています。文語の「我」は大人も子どもも含むのかもしれませんが。この「我」を大人の「私」と考えて、この歌詞を読み、歌うならどうなるでしょう。

「私は、パウロがローマ書でいうように『自分が望むことは実行せず、かえって憎んでいることをする』『わたしは自分の望む善は行わず、望まない悪を行っている』『わたしはなんと惨めな人間で』す。こんな惨めな弱い私ですが、私を愛して共にいてくださる主イエスは強く、私の罪のためご自分の栄を捨てて、天よりこの地上に下ってくださり、十字架にかかってくださいました。そして天の御国の門を開いて私を招いていてくださいます（フィリピ2：6-11）。私の主であるイエス様、どうぞこの惨めな私を清めて力を与えてください。そして、あなたに喜ばれる良い行ないをさせてください」。

一人の罪深いクリスチャンとイエス様の関係、信仰生活のありようがなんとよく表現されていることでしょうか。まるで「天路歷程」を読んでいるようです。この讃美歌の翻訳者の信仰告白だったのでしょか。

心くじけ、やるせなく気力もなくなり自分が厭われるようなとき、私はそっとこの讃美歌口ずさみます。ゆっくり、ゆっくり…と。涙が溢れそうになり、感謝の思いに満たされ、力が出てきます。この讃美歌は決して子どもたちだけのものではありません。幼い頃に口ずさんだ讃美歌は年齢が進み長い人生の旅路を歩むうちに意味が深化してくるでしょう。ちょうど、子どもの頃に読んだ本が大人になって読み返すとまた異なった味わいを与えるように。子どもたちと一緒に賛美して、信仰生活を全うしたいものです。